
研究報告

3か月から1歳6か月までの双子の母親の 離乳への思いと離乳の方法

藤 井 美穂子

Weaning Methods Adopted by Mothers of Twins and Mothers' Feelings 3 to 18 Months Postpartum

Mihoko Fujiii, RN, PHN, RNM, MSN

Abstract

The qualitative descriptive research design based on the Grounded Theory Approach of Saiki (Saiki, 2005) was conducted to elucidate the feelings of mothers toward weaning of twins and the methods of weaning. The participants were five mothers of twins weighing 2200 g or over without congenital anomaly or disease, over 35 weeks' gestational age. Semi-structured interviews on weaning from the 3rd month after delivery were carried out when the mothers were 12 - 18 months postpartum, when their twins were in the weaning period.

Mothers of twins of 3 months and older experienced "difficulty in weaning their twins" and conducted "mother-led weaning" with "concerns related to weaning". Later, as the twins grew, their mothers came to "understand the characteristic of weaning to each baby" and "understand their growth" by "comparing the two" and their "concerns about baby feeding disappeared", and changed to "baby-led weaning."

Mothers received "confirmation from others" throughout the weaning period and "unexpected encouragement from nursery schools" when the babies went to nursery school. They also had more "difficulty weaning their twins" when they conducted "mother-led weaning" and felt that "they could not wean their twins like a single baby." During the "baby-led weaning" period, they were torn between the ideal of "continuing breastfeeding" and longing "to be free from breastfeeding" as a result of the stress of having twins.

Health care and welfare professionals who have close contact with mothers should give them information on weaning of twins, as well as understand what mothers are feeling, in order to support continually them to find the weaning method that fits each of the twins without comparing them to single babies.

キーワード：双子，卒乳，離乳，思い，乳幼児

受理：2009年12月18日

I. 研究の背景

核家族化の進行と少子高齢社会、地域連帯の希薄化などの育児環境の変化により、子育ては困難になっている。また、女性の高学歴化や社会進出など社会背景の変化に伴い、女性のニーズは多様化しており、妊産褥婦の一人ひとりが主体的に妊娠・分娩・育児を行えるような支援が求められている。

このような背景の中、不妊治療の進歩により、わが国の双子の出生率は、平成19年で出産1000対12近くまで漸増している(大木, 2008)。双子は虐待のハイリスク要因であり被虐待児全体の10%を占め(松井・谷村, 2000)、育児支援は早急の対策が必要といえる。しかし、双子の母親が出産や育児を主体的に行えるような支援は十分とは言えず、単胎児と比べ双子の育児は心身ともに負担が大きいことを明らかにしている(服部・堀内・兼子, 2005)。特に、双子の母親が育児困難とする要因には授乳があり(横山・中原・松原他, 2004)、双子の母親は、双子特有の授乳方法や子どもとの関わりの情報を求めている(大高・山本・奥山, 1998)が、入院中の授乳指導は母親の53.3%が受けていないという実態(皆川・服部・宮川, 2000)もあり、双子の育児に即した具体的な授乳指導が行われていないことがうかがえる。

実際に臨床で助産師として勤務している頃に、「授乳、授乳、授乳でこれから2人の子どものような生活が始まるのか全く予想がつかない」と不安を抱えながら退院する双子の母親に遭遇した。双子の母親は、複数の子どもの欲求にどのように対応するのだろう。2児の授乳への対応などの情報がなく、双子の育児はより困難さが増すのではないだろうかと危惧した。そこで研究者は、出産後1か月の双子の母親の育児体験について研究を行った。その結果、双子の母親が、主に授乳を通して肯定的・否定的な思いを抱き、先の見えない授乳に不安を抱えている実像が明らかになった(藤井, 2007a)。

双子の授乳の困難さや負担状況については、いくつかの先行研究により明らかになっており(服部, 2002; 嶋松・高山, 2004; 渡邊・石川・

遠藤他, 1999)、双子の授乳に対し困難さを感じる項目についても、同時授乳(2児と一緒に授乳すること)の難しさ、同時に泣いたときの対処、授乳時間がかかる、授乳量の判断について困難に感じていることの報告がある(伊東・柳原・和田他, 1999; 上川・小林, 2005; 森谷・右田・大竹, 2004; 嶋松・高山, 2004)。

しかし、これらの研究は、授乳に関して一時点の困難や負担を明らかにした研究が多く、双子の母親がどのような思いを抱きながら授乳を行ってきたのかその実像を明らかにした研究は少ない。双子の母親が主体的に自分なりの授乳を継続していくためには、自分なりの授乳像を抱く必要があり、授乳を継続している母親の姿を明らかにする必要がある。

研究者は、出産後3か月までの双子の母親が授乳方法を形成するプロセスを明らかにする研究(藤井, 2007b)を行った。その中で、双子の母親は、一人ひとりの児の特徴に応じ、優先度を考慮しながら自分なりの授乳方法を見いだしていることが明らかになった。その研究では、双子の授乳が困難な時期である出産後3か月間に着目したが、その後、双子の離乳食の開始や卒乳など、栄養の種類の変化に伴い様々な思いを抱きながら2児に対応していることが推測できる。そこで、本研究では、出産後3か月以降から離乳時期までの双子の母親の離乳の思いと離乳方法を明らかにすることを目的とする。

3か月から1歳6か月までの双子の母親が、どのような思いを抱きながら離乳を進めてきたのかを回顧的に明らかにすることで、これから出産する双子の母親が将来の授乳像を抱き、主体的に授乳を行うことができるような支援の一助となる。

II. 用語の定義

離乳とは、母乳や人工乳等の乳汁栄養から幼児食に移行する過程をいう。児の心理面での満足が得られて児が自ら母乳や人工乳を飲まなくなる状態と、母親や家族の意思が働き、児が母乳や人工乳を与えられなくなる状態の両方を指す。

Ⅲ. 研究方法

A. 研究デザイン

グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にした質的記述的デザイン

B. 研究参加者

都内のA病院で平成19年5月以降に、在胎週数35週以降で2200g以上の先天性奇形や疾患を有さない双子を出産し、出産後1年～1年6か月までの母親で、研究参加協力を得られた5名とした。研究参加者は、研究者の修士論文の研究参加者であった。

C. データ収集期間

2008年8月から2008年11月である。

D. データ収集方法

データ収集方法は、インタビューガイドに基づいた半構成的面接法を用いた。インタビューガイドは、出産後3か月以降の乳児期の双子の母親が授乳方法を変更する時の事象やその思いに観点をあて構成した。面接の内容は、研究参加者の承諾を得てICレコーダーとメモに記録した。対象者5名に対して約1時間(55～72分：平均66分)の面接を1回実施した。面接場所と時間は、研究参加者の希望を確認しながら実施し、研究参加者の全員が自宅を希望した。

E. データ分析方法

才木(才木, 2005)のグラウンデッドセオリーアプローチを参考に分析を行った。面接内容について逐語録を作成し、データを切片化し、ラベル名をつけた後で、それらをまとめ直してカテゴリー(概念)を見出し、カテゴリー同士の関係を検討し、比較分析を進め、中心となる概念やその繋がりを見出した後で、データ全体の文脈の中でそれが支持されているかを確認した。最後にカテゴリー間の全体像をつかむために、パラダイムを作成し、全体像をつかんでからストーリーラインを描いた。データ分析結果にあたっては、研究指導者のスーパーバイズを受け妥当性の確保に努め、わからない言葉につ

いては、研究参加者へ解釈したデータを返して確認を求めた。

F. 倫理的配慮

研究参加者に対して面接前に、研究の主旨を文書と口頭で説明し、研究の参加は自由意志であり途中辞退が可能であること、話したくないことは話さなくてよいこと、得られたデータは個人が特定されないよう匿名とし、研究以外の目的で使用されることがないことなど参加者の権利を保障した。また、双子の育児をしている最中であるという研究参加者の特性を十分配慮し、母子の負担が最小限になるよう研究参加者の意向を最優先した。インタビューでは、母親の心身の状態や授乳行為の妨げとならないよう配慮した。母親が希望する場合は、面接援助者と同行し面接中に双子の子守を依頼し、双子に対する負担が最小限になるよう配慮した。子守中の安全を考慮し、助産師の資格を有し、乳児の成長発達を理解して兄と関われる者を面接援助者として選出し、双子の負担を考慮して母親がインタビューに集中でき、短時間でインタビューが終了できるように配慮した。本研究は、日本赤十字看護大学倫理審査委員会(2008-36)の承認を得て行った。

Ⅳ. 結果

A. 研究参加者の概要

総合周産期母子医療センターで、BFH(Baby Friendly Hospital；赤ちゃんにやさしい病院)の認定を受けている病院で双子を出産し、双子の出生時に先天性奇形や疾患を有さず、すぐに経口授乳が開始された初産婦3名、経産婦2名で、平均年齢は34歳であった。分娩週数は36週から40週であり、子供の出生時体重の平均は2498gであった。インタビュー時期は、出産後1年3か月～1年6か月であり、卒乳^{*1}していたのは4名であり、復職のために双子を保育園へ入園させていた母親は3名であった。

¹卒乳とは、完全に母乳を止めること。

B. ストーリーライン

以下、カテゴリー【 】,サブカテゴリー《 》で示す。

双子の母親が、離乳を進めるきっかけは、子どもが母乳を飲まなくなる、乳腺炎に罹患するなど《出来事によるミルクの補充》や子どもが入院する、保育園へ入園するなどの《出来事により焦って始めた離乳食》というように予定外に【とっさの出来事により進めた離乳】と、【周囲に確認】つまり、友人や保育士、医師などの周囲の人々との間で《離乳価値を確認》《離乳の方法を確認》《成長・発達を確認》《健康を確認》を行いながら予定を立てて慎重に進める離乳があった。また、復職にあたり保育園に入園することで《保育園の習慣の継続》《保育園で勧められ使用したフォローアップミルク²⁾》など【予期せぬ保育園からの働きかけ】があった。

出産後3か月以降の双子の母親は、いずれも《体格差への気がかり》《体格差により将来比較されることへの気がかり》や、2児³⁾が感染症を移し合い罹患しやすいことで《感染症への気がかり》など双子の【離乳に伴う気がかり】、《欲求が通るまで持続する2児の泣き》《適量を摂取できているのか不安》《母乳分泌が良すぎることに伴う離乳の困難さ》《二人分の離乳食の準備の大変さ》《揃って離乳食を食べるタイミングの困難さ》などの【双子の離乳の困難さ】を実感していた。

それらの体験を通して母親は、《苦痛なく短時間で授乳する方法の模索》《体重の小さい子の母乳量が充足できるように順番を考慮》《楽を実感して一緒に始めた離乳食》《安心を得るためのミルク補充》《仕事を考慮して使用したミルク》《面倒を回避するために合わせた2児のスケジュール》《双子を言い訳に進めた離乳食》を行いながら、【母親主導型の離乳】を行っていた。

²⁾フォローアップミルクとは、牛乳に不足している鉄とビタミンを補強し、牛乳で過剰となるたんぱく質、ミネラルを減らした栄養補強用の調製粉乳である。(2008, 柳澤)

³⁾2児とは、子ども二人(双子)の一人一人の個性を強調して表現したい時に用いる用語であり、子ども二人(双子)を一纏りにして表現する時は、双子という用語を用いる。

離乳を進める全過程で双子の母親は、【周囲に確認】を行い周囲の言動の影響を受けながら、【2児の比較】によって《2児の相違》《2児の発達差》などを実感し、【2児の離乳に関する特徴の理解】を深めていた。さらに、2児の【成長を実感】することで【離乳食の気がかりが消失】していった。つまり、2児を比較することでお互いが《消化状況の指標》《体重増加の指標》となり、《満足する食事量の確認》《成長の確認》《個性の理解》など各々の特徴の理解ができるようになっていった。そして、《起きるタイミングが合ったことで達成した離乳》《待たせていられるようになって実現可能となった離乳》《子どもの発育の実感》《成長によって実現可能となった同時授乳》《必要性が無くなりやらなくなった同時授乳》《よく食べることの実感》《2児のやりとり》などを通して《2児の成長》を実感していった。また、2児の成長を実感することで《体重増加から順調な成長を確認》《個性と捉えるようになった体重差》《気にならなくなった食に対する平等》《感染症の懸念が減少》《双子のイメージの消失》し、双子の離乳食の気がかりが消失していった。

また母親は、双子の成長に伴い周囲から双子に見られないことを実感し、《双子のイメージの消失》により《食に対する平等への気がかりの消失》を体験していた。そして、《子ども主体で進める離乳》《子どもから学んだ離乳のモットー》《アピールに応じて順番に食事》する等の【子ども主体型の離乳】へ変化していた。その頃には、【卒乳の時期を熟考】つまり、夫の協力、2児のタイミング、母親自身の予定等の《タイミングを見計らって卒乳の時期を熟考》していた。

以上のように出産後3か月以降の母親は、《周囲から双子にみられたい》双子を《優劣をつけた比較はされたくない》《平等に授乳・離乳したい》という願望を持ち【母親主導型の離乳】を行っていた。その過程で、単胎児のように母乳のみでは育てられないことを実感し、双子の離乳に対して否定的な感情を抱くが、《ミルクが母乳よりも優勢》であるとミルクに対して肯定的な捉え方をすることで、双子の離乳に対する

否定的な感情を断ち切り、単胎児のように離乳するという理想と現実のギャップの埋め合わせをして《単胎児のようにできないジレンマ》に対応していた。

さらに母親は、《2児の発達差》《2児の相違》に気づき、【成長を実感】することで、【子ども主体型の離乳】へと変化していた。その頃には卒乳を考慮し、《継続していた母乳が終了する寂しさ》から母乳を継続したいという理想と、単胎児とは異なり2児の授乳のストレスが強いため《母乳任務終了によるストレスからの解放》への期待を抱いて、離乳を進める現実があった。このように双子の離乳の時期の母親は、単胎児の一般的な離乳と比較したり、単胎児を育てた過去の経験と比較したりしながら【理想と現実の間で揺れ動く思い】を抱いていた。

C. カテゴリーの説明

ここでは、【母親主導型の離乳】から【子ども主体型の離乳】へと変化する過程での【理想と現実の間で揺れ動く思い】に着目し、双子の離乳に特徴的だった11のカテゴリーの特徴と説明を記述し、図1にカテゴリーの関連図を示す。「」内に研究参加者の言動を（ ）内は研究参加者をアルファベットで示し、切片化番号を付記した。

1. 【母親主導型の離乳】

【母親主導型の離乳】とは、母親の希望や都合等、母親のペースで離乳を進めることであり《苦痛なく短時間で授乳する方法の模索》《体重

の小さい子の母乳量が充足できるように順番を考慮》《楽を実感して2児を一緒にした離乳食》《安心を得るためのミルクの補充》《面倒を回避するために合わせた2児のスケジュール》の5つのサブカテゴリーで構成されていた。例えばB氏は、離乳食に手間がかかることを回避するために、双子の離乳食の固さ、与え方、時間を一緒に合わせていた。

「離乳食は少なくとも私の方でもう一緒に食べさせてました。もう手間がかかるので、はい。いっぺんに食べさせなきゃ2回手をかけなきゃいけなくなってしまうので、食事は必ず一緒に。…略…基本的には一緒に同じ物を同じ位という感じで食べさせてます」(B: 06)

2. 【双子の離乳の困難さ】

【双子の離乳の困難さ】とは、双子の離乳を進める上で母親が抱く困難さであり、《二人分の離乳食の準備の大変さ》《適量を摂取できているかの困難さ》《母乳分泌が良すぎることに伴う離乳の困難さ》《揃って離乳食を食べるタイミングの困難さ》《欲求が通るまで持続する2児の泣き》の5つのサブカテゴリーで構成されていた。例えばE氏は、2児に嚥下機能の発達の違いにより、2児が揃って離乳食を食べるようにタイミングを合わせることにに対して困難さを感じていた。

「(第1子は食べるのが)早かった。それで、切り方とかを、こっち(第1子)の調子に合わせて、こっち(第2子)を食べさせてると、うえってなったりとか、よくしてたけど、こっち(第1子)は我慢できなくて、もっともって言って、そういうペースとかは、こっち(第2子)ばかり構ってると、こっちが(第1子)早いからずっとこっち(第2子)へこうやってると、こっち(第1子)は怒り始めたりとか」(E: 75)

3. 【離乳に伴う気がかり】

【離乳に伴う気がかり】とは、離乳を進める上での母親が気がかりに思っていることであり《体格差の気がかり》《体格差により将来比較されることへの気がかり》《感染症に対する気がかり》で構成されていた。例えばA氏は、将来

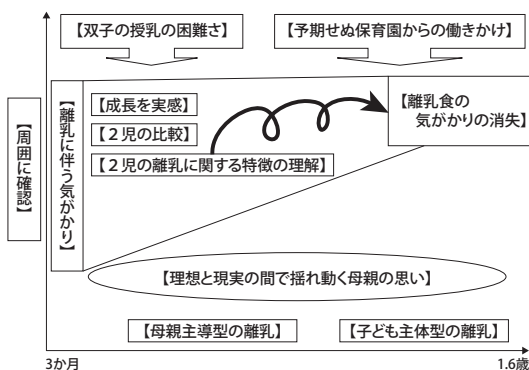


図1 カテゴリーの関連

的に体重差があることで優劣のある比較をされたくないという気がかりがあり、平等に同じように大きくなって欲しいという思いを抱いていた。

「やっぱり同じ、双子って感じに見て欲しい周りから見られたらいいというのがある。やっぱり平等に見られたい。なんか比較されるのが嫌だよね。同じように、人から、こっちはこんなぐらいなのにこっちはとか」(A: 94)

4. 【2児の比較】

【2児の比較】とは、2児の成長差や発達差の相違を比較することであり、《体重差》《発達差》《好みの相違》《食べ方の差》の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

例えばB氏は、2児の体重は標準体重の範囲であるが、2児の体重差の要因は何かを考え2児の比較を行っていた。

「やっぱり体重差が1kg以上あるんで、まあどっちも一応標準の範囲内であるんですけど、あの気にはなりますよね。Rの方が食べ過ぎてるのかなあって思ったりすることもありますし、逆に言うと、こっちの軽い方がものすごく食べてるんですけど、体重が増えないのでその分、動いてるのかなあとかも思ったりもするんですけど、はい、やっぱり二人こう身近にいますので、どうしてもそういう点では比べて大体違うなあとは思いますね」(B: 29)

5. 【2児の離乳に関する特徴の理解】

【2児の離乳に関する特徴の理解】とは、双子の対象を指標としながら2児を比較することであり、《消化状況の指標》《体重増加の指標》《満足する食事量の確認》《成長の確認》《個性の理解》の5つのサブカテゴリーで構成されていた。例えばB氏は、2児の排便の性状を比較することで、消化状況を評価して離乳食を進めており、2児の互いの排便が消化の指標となっていた。

「例えば消化不良で何か出てきちゃったりする時は、もう一人のどうなのかなってというのは、それはやっぱり見てみて、で、大体同じような

感じで出てきると、あーやっぱりこれはまだ食べられないんだなとか消化できないんだなとかって」(B: 22)

6. 【成長を実感】

【成長を実感】とは、2児が健康に発育・発達していることを実感することであり《2児の順調な発育》《よく食べることの実感》《2児のやりとり》《2児の正常な発達》《起きるタイミングが合ってきたことより達成した離乳》《待たせていられるようになって実現可能となった離乳》《成長により実現可能となった同時授乳》《必要性が無くなってやらなくなった同時授乳》の8つのサブカテゴリーで構成されていた。双子の授乳で奨励されている同時授乳は、ほとんどの母親が実施していなかった。例えばC氏は、同時授乳が実施できなくなったことで離乳を進めていた。母親は、2児の成長を実感しながら、抱き方や順番など授乳方法を変化させ離乳を進めていた。

「いつからか私が仰向けに寝て二人がそこに覆い被さるって形になったんですけれども、結構それがしんどくて、あの二人が眠りにつくときにやっぱりちょっと下に落ちてくるじゃないですか、ずるずるとそうすると乳首がちぎれそうに痛くなって、もうそれが痛くて…略…ずっと乳首をくわえていて、それを無理やりそーっと、もう寝ちゃったからと思ってそーっと指を入れて外そうとするとぐあっと嘔んで何度か流血騒ぎになって、なんかそういうのでちょっと幸せだったおっぱいタイムが苦痛になってきたのが、止めようと思ったきっかけですね」(D: 15)

7. 【離乳食の気がかりが消失】

【離乳食の気がかりが消失】とは、離乳食を進める上での母親の気がかりが消失することであり、《体重増加から順調な成長を確認》《個性と捉えるようになった体重差》《感染症の懸念が減少》《双子のイメージの消失》《気にならなくなった食に対する平等》の5つのサブカテゴリーから構成されていた。例えばA氏は、双子に同じ大きさになって欲しいというイメージを抱いており平等にしたいという思いがあったが、

周囲から似ていないと言われることで身長差や体重差を個性と捉えるようになり気がかりが消失していた。

「食べる量はやっぱり二人とも全然違くて、今はもう全然、本当に違くて、…略… Aが身長もあって体重もあって、なんかやっぱりIもちゃんとよく動くようになったので身長はAより小さいんですけど体重も少ないので、まあこれでちょっと身長差が出てきたのもう個性だなんて、その子その子の育ち方なんだなんて思って…略…(他人から)今の方が言われるけど、年子って言われてAが大きいんで、それくらい大きさが違うんだと思ったりして、顔も違うし、多分 そう思っちゃうんでしょね」(A: 90)

8. 【子ども主体型の離乳】

【子ども主体型の離乳】とは、子どものペースに応じた離乳であり《アピールに応じて順番に授乳》《子ども主体で進める離乳食》《子どもから学んだ離乳のモットー》の3つのサブカテゴリーから構成されていた。例えばC氏は、いつもは首を振って食べない双子が遊びながら長子と共に楽しく食べている光景を見て、食事には楽しむことも必要であることを学び取っていた。

「きゃっきゃっきゃっきゃしてたんで、携帯でビデオ撮るぐらい自分の中で あっ撮りたいと思って喜んで食べて…略…何か楽しそうでお兄ちゃんもいつも口に入れられてるけど、KとTが自分で食べてるって言うのが、こう見てておもしろかったんですよ。きつとね、で、加わってきてで、口に入れろーとか食べさせてみたりとか、つまんでみたりとかね。そういうのを見ててあーそういうのも必要なんだとか思いました。楽しむのも楽しんで食べるのもってまあ余裕がないとそれは本当にできないですけれどね、ね、自分の中で」(C: 48)

D氏は、食事を楽しくしたことで、2児の機嫌がシンクロナイズされ、結果的に食事時間が短縮した経験があり、食事を楽しむことをモットーにして離乳を行っていた。

「食事は基本的には楽しくをもっとーに楽しく

ないとかっちもつらくなっちゃう…略…笑いながらやってればー、もう一人の方が笑い出したらしいそうするともう一人も笑ったりとか、あと一機嫌のいい方に集中してご飯を食べさせるとなんか怒ってるほうも、途中でなんか、怒りが収まって、なんかあまり怒りとかあちらのご飯のイライラにあまり付き合わないようにしてるね」(D: 56)

9. 【周囲に確認】

【周囲に確認】とは、友人や保育士、医師などの周囲人々との間で、離乳の期間中全てを通して、進め方や方法に関して確認を行うことであり、《離乳の価値を確認》《離乳の方法を確認》《成長・発達を確認》《健康を確認》の4つのサブカテゴリーで構成されていた。全員の母親は、実母や夫、友人や保育士、医師など周囲の勧めを受けて離乳を行っていた。例えばC氏は、周囲の単胎児の離乳食の進め方と比較して3回食のリズムを付けるのが困難であり、育児書を参考にすることが当てはまらず不安を高めていた。

「不安もありましたね、ほんとだったらみんなは3回食で食べてるのに2回だし、そういうので栄養面だったり、パンとか与えてパンだって甘かったりするじゃないですか、そういうの毎日与えてるからそういうの気になながらも…略…育児書でまあ平均的なのが書いてあるんでしょうけどそれに沿ってるとやっぱり安心するところもあるし、大分逸れてるかなってというのがあった」(C: 16)

10. 【予期せぬ保育園からの働きかけ】

【予期せぬ保育園からの働きかけ】とは、母親の覚悟なしに、保育園から受ける離乳の影響であり、《保育園の習慣の継続》《保育園で勧められたフローアップミルク》の2つのサブカテゴリーから構成されていた。例えば一人目が完全母乳育児だった経産婦のE氏は、保育園から勧められる通りに離乳を進めていた。

「保育園で『何にしていますか?』って言われて、『まだ普通のミルクです』って言ったら、なんか、(フォローアップミルク)って、それから(フ

フォローアップミルク) やったような気がします。それまでは普通にやってた…略…どういうタイミングであればいいのかも、そんな知識もなかったの」(E: 125)

11. 【理想と現実の間で揺れ動く思い】

【理想と現実の間で揺れ動く思い】とは、理想と現実の間で揺れ動く母親の思いであり、《単胎児のようにできないジレンマ》《ミルクが母乳より優勢》《継続していた母乳が終了する寂しさ》《母乳任務終了によるストレスからの解放》の4つのサブカテゴリーから構成されていた。【母親主導型の離乳】の時期は、「単胎児のように進めたい」理想と「単胎児のように離乳が進まない」現実の間で感情が揺れ動き、【子ども主体型の離乳】の頃には、「母乳を継続したい」「授乳のストレスから解放されたい」という両者の思いを抱きながら離乳を進めていた。例えばC氏は、2児のタイミングが合わずに単胎児のように、3回食に進めないことで不安を感じていた。D氏は、双子じゃなかったら離乳はもっと先であったと振り返っていた。

「不安もありましたね。ほんとだったら みんなは3回食で食べてるのに…略…気になった」(C: 16)

「やっぱり双子じゃなかったら、もっと長くあげられたのかなとかは、結構何度も思いました」(D: 86)

全員の母親から離乳することの寂しさと、離乳後の生活を期待する声が聞かれた。離乳により飲酒が可能となったことや朝までぐっすり眠れるようになったD氏は、身体的・精神的負担が軽減したことに対して驚きを示していた。

「ちょっとワインを嗜んだり、そんな時間がもてるようになり、なんだよ、おっぱい止めるとこんなに楽になるんだって、びっくりしました」(D: 32)

前回は完全母乳哺育であり、前回はフォローアップミルクや離乳食をほとんど使用せずに卒乳となったために、今回の離乳の進め方がわからず困惑していたE氏は、児が泣く毎に家族か

ら「おっぱいじゃないの?」と言われることに對してストレスを感じていた。またC氏は、第1子の単胎児の離乳と比較して寂しさと解放感の両者の思いを抱いていた。

「最初の子どもの時は、もうおっぱいをあげるのが嫌だったんですよ。もうそういうふうと言われるのがすごい嫌でおっぱいについて言われるって言うか。そういうのがあったんで、なんかこう淋しいのもあるし、おっぱいの任務が終わってそういうストレスじゃないけど、それから解放されるっていうか、そういうのはありますね」(C: 109)

V. 考 察

太田ら(太田・菅原, 2006)は、単胎児が母乳を止めた時期や母乳を止めた理由を質問紙調査により明らかにしている。また、双子の養育する母親の育児困難感の調査(嶋松・高山, 2004)では、同時授乳方法の困難さ、授乳リズムの違いによる授乳の時間がかかる困難さ、夜間の授乳の大変さなど授乳に関する困難さが明らかになっており、先行研究においては、離乳や授乳の実態に焦点を当てた定量的研究が多い。

本研究は、これまで明らかにされていなかった双子の離乳に焦点をあて、離乳の経過を回顧的に振り返り、個々の母親の離乳の思いと離乳の方法に着目してデータに向き合い分析した。その結果双子の母親は、単胎児のように個々の児の欲求に応じて離乳を進めたいという思いを抱く一方で、二人分の食事を用意して与えるために費やす時間と体力的な負担を考慮して、理想と現実の中で自分の気持ちに折り合いをつけていたことが明らかになった。つまり、双子の母親が自分なりの離乳が進められるようになるまでには、2児を比較することで2児の個性や特徴を理解し、離乳の方法に対して「これでよい」という確信を得ると同時に諦める理由づけを行いながら子ども主体型、すなわち子どもの欲求に応じて、食事を楽しみながら与えることができるように変化していた。

双子の離乳をすすめる過程で、双子に特徴的

と思われる出来事や母親の思いを理解することが重要と思われる。以下に双子の離乳で特徴的と思われた2点に焦点を当て考察すると共に、双子の離乳への支援について提言する。

1. 双子の母親が離乳過程で抱く思い

平成17年度の乳幼児栄養調査結果(厚生労働省, 2006)によると、単胎児の場合は離乳開始時期である4～6か月に離乳や食事について不安な時期であり、離乳食については、「食べものの種類が偏っている」「作るのが苦痛・面倒」の項目で困ったと回答する者が多いことが明らかになっている。本研究においては、双子の母親は、子どもがお互いに感染症に罹患しあうことや無意識に2児を比較するという特徴があり、感染症や体格差を気がかりに思っていること、欲求が通るまで持続する2児の泣きや二人分の離乳食の準備の大変さ、揃って離乳食を食べるタイミングの困難さ等、双子に特化した離乳食に対する具体的な困難さが明らかになった。さらに双子の母親は、このような困難な状況について予測できていなかったことで不安を高め、離乳時期を通して周囲の人々から離乳の進め方について確認を取っていたと考えられる。つまり、単胎児のように離乳開始時期の一時点に不安が限定するのではなく、離乳の情報がなく先の見通しが立たないことで離乳を進める全過程において、双子の一方の食事に興味を示す、自我を通すためにお互いが泣き続ける、2児の生活リズムが合わない、双子同士で感染症に罹患しあう等、児の成長と共に生じる双子に特化した出来事の影響を受けて不安が高まっていたことが考えられる。

また堀内(堀内, 2005)は、2歳児を持つ単胎児の母親に対して離乳についてのアンケート調査を行い、卒乳・断乳には様々な形態があるが、いずれにしても卒乳後の母親は“卒業”に伴う身体的・心理的に寂しさと空虚感が生じると述べている。しかし、本研究対象者は、単胎児のように母乳を継続したいという寂しさを抱く一方で、朝までぐっすり眠れる、我慢していたお酒が飲める等の母親自身の欲求を満す体験をしたことで、母乳任務終了によるストレスからの

解放を実感し喜びを表出していた。つまり、双子の母親は、前述した双子に特化した出来事を体験し、自分自身の欲求を犠牲にしながら2児の母乳育児を継続しており、母乳という自分自身の身体から生産される栄養で2児を成長させなくてはならないという責任から解放されることで大きな安堵感を得るということが、単胎児の離乳時に抱く思いと異なる点であると考えられる。

このように双子の母親は、成長と共に生じる予測しなかった出来事により離乳の困難さを高め、離乳時には、単胎児のように母乳を継続できなかった後悔の気持ちを含む寂しさと、授乳から解放される喜びというアンビバレントな感情を抱いている。殆どの保健施設では、卒乳指導を1歳6か月健診で行っている(堀内・依田・橋本, 2003)。しかし、双子の母親が自分なりの離乳をイメージして後悔しない離乳を進めるために、卒乳前の各健診等で双子の母親の感情を理解した継続的な支援が必要であると考えられる。

2. 比較しながら進める離乳

離乳期の双子の母親は、単胎児と比較して離乳をイメージし、単胎児と同様に離乳を進めたいという理想を持ち、単胎児と比較しながら離乳(方法、進め方、内容)への努力を行なった。そして、単胎児と同じように進められない実態に戸惑いながらも自分なりの離乳の方法を見出していた。つまり、2児が成長し離乳が進むにつれて、2児を比較することで2児の個性や特徴を理解して、理想通りにはいかない現実を受け入れことで、子ども主体型、すなわち子どもの欲求に応じて、食事を楽しみながら与えることができるように変化していったと考える。

また、畑中・高野(2004)らは、単胎児の初産婦と経産婦の困難感の実態調査で、母親の育児経験が困難感に影響し、経産婦の方が初産婦よりも困難感が弱いという結果を報告している。しかし、本研究の研究参加者の経産婦は、授乳でフォローアップミルクや離乳食をほとんど使用せずに卒乳となった前回の離乳の体験と比較して、今回の双子の離乳の進め方がわからず困惑していた。経産婦であっても小さめの2児の離乳を同時に進める体験は初めてであり、かえ

って前回単胎児の離乳方法を記憶しているため、その記憶と双子の離乳の進め方を比較し、双子の離乳を「特別」と捉え困難さ高めていたと考える。

このように双子の母親は、単胎児の離乳と比較することで理想と現実のギャップを体験して、双子の離乳の困難さを高めていると考える。その一方で、2児の成長や双子同士の比較によって離乳の進め方が確認できるようになり、離乳の困難さが低下したと考えられた。双子の母親が離乳期間を通して「比較」という行為を繰り返し、周囲に確認しながら母親主体型の離乳から子ども主体型の離乳へ移行する実像が明らかになった。

本研究で明らかになった双子の離乳の実像は、双子の母親が離乳をイメージし、自分なりの離乳を進めるための示唆となる。また、経産婦や初産婦に限らず双子の離乳には、2児を「比較」することが重要であり、双子の母親が、優劣を付けるのではなく、2児の特徴がわかるような観点を培える支援の必要性が示唆された。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、母乳育児を推奨するBFHに認定された1施設で出産した母親5名を研究参加者としており、参加者数、及び参加者の出産施設の特徴的偏りがある。また、flip-flop techniqueや遠い比較などの理論的比較ができておらず、理論的サンプリングも不十分であった。今後は、より多くの施設で出産した双子の母親を対象に、データ数を増やし授乳の種類など様々な特徴の相違を捉え、双子の母親の離乳の実像を明らかにするために研究を重ねていきたい。

VII. 結 語

出産後3か月以降の双子の母親は、【双子の離乳の困難さ】を実感し、【母親主導型の離乳】を行っていた。その後、児の成長に応じて【2児の比較】によって、2児の【特徴を理解】【成長を実感】でき【離乳食の気がかりが消失】し、【子ども主体型の離乳】へと変化していっ

た。また、離乳の時期の双子の母親は、単胎児と比較しながら【理想と現実の間で揺れ動く思い】を抱いていた。

双子の離乳には、2児の特徴が理解できるような情報を提供するとともに、母親が、単胎児と比較せずに、2児に応じた離乳の方法を見い出せるように継続的に支援する必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力いただきました皆様、ご助言くださいました先生方へ心より感謝申し上げます。なお、本研究は、平成20年度日本赤十字看護大学課題研究費の助成を受けて実施いたしました。

文 献

- 藤井美穂子(2007a). 双子を持つ母親の退院後1か月間の育児体験. 日本助産学会誌, 21(2), 77-86.
- 藤井美穂子(2007b). 出産後3か月までの双子の母親が授乳方法を形成するプロセス. 日本赤十字看護大学大学院 修士論文.
- 服部律子(2002). 乳児期の双子を持つ母親に関する分析と考察～育児の大変さとその支援について～. ペリネイタルケア, 21(8), 78-84.
- 畑中京子・高野政子(2004). 乳幼児を持つ母親の離乳食に対する困難感と食物アレルギーに関する検討. 日本看護学会論文集 地域看護, 35, 51-53.
- 服部律子・堀内寛子・兼子真理子(2005). 双子の母親の健康状態と保健指導の課題. 岐阜母性衛生学会誌, 33巻, 33-38.
- 堀内勤・依田卓・橋本武夫(2003). 育児不安・育児困難への周産期からの予防対策に関する研究～母乳育児支援：3：保健施設での母乳育児支援の現状～. 平成15年度厚生労働科学研究地域における子育て支援ネットワークの構築に関する研究報告書, 56-74.
- 堀内勤(2005). 断乳と卒乳-2. 卒乳, 周産期医学, 35増刊号, 348-351.
- 伊東美由紀・柳原玲子・和田幸江他(1999). 双胎褥婦への育児指導の一考察. 岐阜県母

- 性衛生学会雑誌, 24巻, 27-29.
- 厚生労働省(2006年6月29日).平成17年度乳幼児栄養調査結果の概要. <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/dl/h0629-1b.pdf> より, 2009/11/16検索.
- 皆川貴子・服部律子・宮川幸代(2000). 双子の授乳状況の実態と課題(第1報). 母性衛生, 41(4), 454-458.
- 松井一郎・谷村雅子(2000). 児童虐待と発生予防. 母子保健情報, 42, 59-68.
- 森谷さとり・右田周平・大竹まり子(2004). 山形県における双子をもつ母親の育児状況の把握と支援の検討. 山形県公衆衛生学会, 第31回講演集, 59-60.
- 大木秀一(2008). 多胎児家庭支援の地域保健アプローチ. ビネバル社.
- 大高恵美・山本捷子・奥山朝子(1998). 双子を持つ家族への育児支援—看護職の双子の育児に関する情報提供の実態から—. 日本母性看護学会論文集, 母性看護, 29, 118-120.
- 才木クレイグヒル滋子(2005). 質的研究方法ゼミナール グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ. 医学書院.
- 嶋松陽子・高山知美(2004). 双子を養育する母親の育児困難感とその要因. 保健科学研究誌, 1, 35-42.
- 土取洋子(2003). 岡山県下の乳幼児の食生活と健康に関する調査研究. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 10(1), 31-37.
- 上川友美・小林康江(2005). 双子を持つ母親が行なっている育児に関する研究. 山梨県母性衛生学会誌, 4(2), 21-27.
- 渡邊タミ子・石川操・遠藤俊子・渡邊竹美(1999). 0歳から3歳頃までの双胎児のいる母親の育児支援の課題に関する検討—単胎児との比較—. 山梨医科大学紀要, 16, 39-46.
- 柳澤正義(2008). 授乳・離乳の支援ガイド 実践の手引き. 母子保健事業団.
- 横山美江・中原好子・松原砂登美・杉本昌子・小山初美・光辻烈馬(2004). 多胎児をもつ母親のニーズに関する調査研究. 日本公衆衛生雑誌, 51(2), 94-101.